



軍馬補充部三本木支部切田分厩舎
(出典：日刊東北社「なつかしの三本木」)

かつて日本一の軍馬補充地として栄えた青森県十和田市。元々十和田市は十和田湖の噴火による土石流で出来た台地であり、3本の木しか生えていない荒れ果てた土地から三本木と呼ばれていた。荒れ果てた土地に加え夏にはオホーツク海から冷たい風「やませ」が吹き荒れ、当時は農作物の栽培に苦戦し貧しい生活を送っていたが、やませは海水のミネラルを多く含んでいたため馬の生育に適した牧草が育ち馬と人が共存し暮らしていた。

この馬は日本在来馬(和種馬)の「南部馬」であり、他の馬と比べ体格がよく、剛脚で扱いやすい馬だったため、古くから戦の場面で使われ源義経も愛用していたと言われる。

まちむら発見①

失われた馬文化の復活と未来への継承

青森県十和田市 十和田流鏑馬観光連盟



桜流鏑馬

このことから第二次世界大戦までは農民も馬を育て、馬を軍馬補充地に売り渡すことで生計をたてていた。

第二次世界大戦が終戦し軍馬の必要がなくなること
で古来から継承してきた日本在来馬(和種馬)「南部馬」
の血統が途絶え、戦の中で弓を射る技術も衰退した。

その失われた馬の歴史と技術の復活、馬を観光資源
として活用し乗馬人口の拡大と新たな馬の活用、地
域の観光推進のために活動しているのが当団体であ
り、活動内容としては、流鏑馬にスポーツとしての魅
力を加えて「する人」「みる人」「支える人」で構成し
文化形成を行うことで、持続可能な(Sustainable)関
係人口(Relatedpopulation)の創出による域内連携
(collaboration)・Towada SRCモデルをモットーと
している。

元々流鏑馬は神事として男性により1000年間守

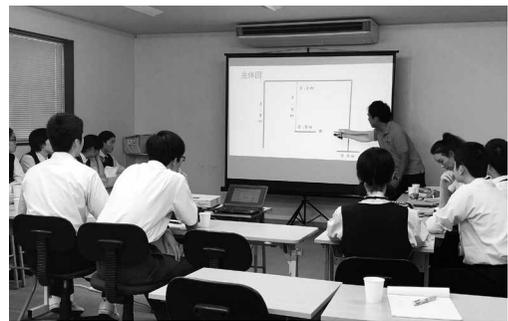
られてきた。グローバル化・多様化が進む現代社会においてスポーツ流鏑馬ではジェンダーレスの考えを用い、女性だけが参加できる世界で唯一女流騎手だけの流鏑馬大会「桜流鏑馬」を開催。古き伝統あるものを現代の生活様式に落とし込み開催した桜流鏑馬の考え方は、「第20回ふるさとイベント大賞」や「スポーツ文化ツーリズムアワード2016」にて文化庁長官賞の受賞、COOL JAPAN AWARD 2019 受賞など多くの名誉ある賞を受賞した。その結果桜流鏑馬は年々来場者数が増加し約2万人が来場するイベントとなり、十和田市のスポーツ流鏑馬を題材にした小説も出版されるなど十和田市のPRとして貢献していると考えられる。上記の功績からスポーツ流鏑馬に興味を持ち、競技者として活動したいとの声が多く、当初は数名の会員で始まった取り組みであったが現在では400名余りまで競技人口が増加した。

その後、現代の生活様式に対応したことで伝統文化の継承を実現した桜流鏑馬の考えを未来へ継承する、次世代リーダー育成プロジェクト「Future Generations」を発足。「Future Generations」では学習塾と連携し「スポーツ流鏑馬で十和田市を日本一輝ける街へ」をテーマに、ワークショップ、イベントの企画・実行、プレゼンテーションなどを実施し、実践的な発想力・論理的思考力・コミュニケーション力・実行力の育成を目指すべく、地域社会や様々な人と触れ合いながら、学習や経験を積み重ね、社会で活躍する力を習得するための実践活動を実施した。

活動の中で学生がこの活動をもっと広域に広げたい



「馬探」表彰式



Future Generations ワークショップ

と考案したプロジェクトが地域の馬の歴史・文化探求コンテンツ「馬探」である。「馬探」は「自分たちの地域と『馬』との関わりが感じられるもの」をテーマに中高・大学生が自分の住む地域を発見・再確認し、郷土に対する愛着や誇りを育む機会と、これらの取り組みを広く発信することで、地域住民にとっても、地域の魅力を再認識する機会となることを目的としたプロジェクトで初年度は全国各地から10件ほどの応募が届き、十和田流鏑馬観光連盟や「Future Generations」の活動がより広域となった。

活動が広域になったことで、十和田の馬の歴史・流鏑馬の技術は日本のみならず海外にまで認知されるようになった。特に伝統文化を現代の生活様式に落とし込み、守り発展させていく柔軟な考えと未来のリーダーを育てる質の高い教育が合わさった活動は持続可能な社会に貢献していると評価され、オーストラリアやドイツなど海外の方が実際に体験したいと十和田に訪れた。最初は過去の失われた地元十和田の伝統文化を守りたい、復活させたいと少人数で始めた活動が地域の学生を通し、世界へ認知され次世代へ継承されている。失われたかと思われていた十和田の馬の歴史や流鏑馬の技術は、形を変えながらも伝統文化は守りながら未来へ継承されている。これからも当初掲げたTowards SRCモデルに基づきながら地元十和田の発展に努めていきたい。

(十和田流鏑馬観光連盟会長 上村鮎子)